早稲田大学スポーツ科学学術院スポーツ科学研究センター 主催

第63回東伏見スポーツサイエンス研究会

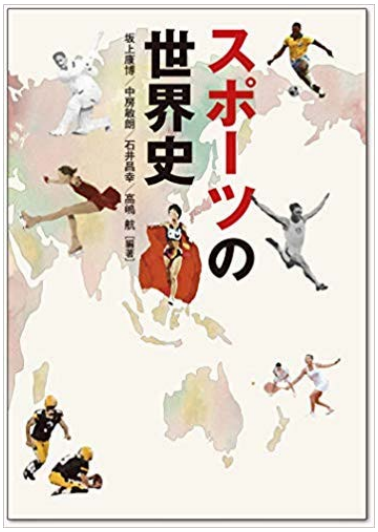
日時　2020年2月10日（月）　**16:30~18:00**
場所　早稲田大学79号館（STEP22）302教室

演題　スポーツの世界史を描くことの難しさ、面白さ
—『スポーツの世界史』の編集をふり返って—

坂上康博（一橋大学）

■2018年の秋に『スポーツの世界史』（一色出版）を上梓した。編者は、ぼくと石井昌幸さん、高嶋航さん、中房敏朗さんの4名。執筆陣は、それに16名を加えた計20名。このメンバーで、世界20か国とアフリカ大陸、イスラーム圏、カリブ海地域を網羅した〈近代スポーツの世界史〉を描こうと試みた。本書がめざしたのは、専門家向けの論文集でも、また事典や教科書的な記述でもなく、読み物として面白い一般読者向けの「スポーツで読む世界史」である。“面白さ”の中身は、各執筆者にお任せしたが、共通のねらいを、スポーツを通してその国や地域の歴史的個性が浮かび上がらせ、世界の多様性についての理解を深めるという点に置いた。ナショナリズム、アイデンティティ、ジェンダー、メディア、植民地、暴力、人種、民族、階級、市民結社、国民統合、政治的利用等々——それぞれの国や地域の歴史的な特徴を示すような魅力的なテーマや視点、興味深いトピックスやエピソード等々、各自の得意なアプローチが披露されているはずである。今回の講演では、本書の編集を通して感じたスポーツの世界史を描くことの難しさや面白さなどについてざっくばらんに語ってみたい。

■ プロフィール：1959年、大阪生まれ。高知大学教育学部卒業、東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了、一橋大学大学院社会学研究科博士課程満期退学。福島大学行政社会学部教授（スポーツ文化論担当）などを経て、現在一橋大学大学院社会学研究科教授。主な研究領域はスポーツ史、スポーツ文化論。著書に『昭和天皇とスポーツ』（吉川弘文館）、『にっぽん野球の系譜学』（青弓社）、『スポーツと政治』（山川出版社）、『権力装置としてのスポーツ』（講談社）、編著に『12の問いから始めるオリムピック・パラリンピック研究』（かもがわ出版）、『海を渡った柔術と柔道』（青弓社）、共編著に『スポーツの世界史』（一色出版）、『幻の東京オリンピックとその時代』（青弓社）など。



■編著『スポーツの世界史』

早稲田大学 スポーツ科学学術院
Faculty of Sport Sciences, Waseda University

世話人：正木宏明・中川剣人・工藤龍太
早稲田大学　スポーツ科学学術院
E-mail: ryutak77@aoni.waseda.jp